

演習科目

時間割コード	第1学期:774101、第2学期:774201	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期8月23日(火)～26日(金)、第2学期2月21日(火)～24日(金) 各日1～4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	分子生物学演習	定員	5名以内
開講科目名(英)	Exercise Class for Molecular Biology	単位数	2単位
場 所	大阪大学大学院連合小児発達学研究科 ・分子生物遺伝学研究領域研究室	年次	2年
担当教員	片山泰一、松崎伸介、三好 耕、高村明孝 (大阪校)	授業形態	講義、演習
講義題目	分子生物学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	最近の精神・神経疾患(障害)研究に関するアプローチの進歩には目を見張るものがある。特に、発症に関わる脆弱遺伝子の発見により、分子メカニズムの解明が一気に加速すると考えられる。従って、本演習では、精神・神経疾患(障害)のみならず、基礎医学における分子生物学的、生化学的、形態学的な最新の知識に対する理解を、実習を通して深める。		
学習目標	本演習終了時には、異なるバックグラウンドを持つ学生が全て精神・神経疾患(障害)研究につながる以下の基礎的研究手法について、実践できる。1.DNA、RNAの増幅、組替等、核酸の取り扱いができる。2.特異的タンパク質を電気泳動や抗体を使って証明できる。3.基本的な細胞の取り扱いと注目する遺伝子を細胞に導入できる。4.さまざまな疾患を解明する方法論を論ずることが出来る。		
授業計画	<p>1. 講義(全5回) (片山泰一/5回) 精神・神経疾患をはじめとする生命現象に関連する研究を行う過程で必要と考えられる分子生物学的手法を用いた実験の基本的な理論の解説を行い、理解を深める。</p> <p>2. 演習(全10回) (松崎伸介、山田浩平/5回) 精神・神経疾患研究に必要な、基本的な分子生物学的手法の実習を行い、遺伝子組み換え、種々のベクターを用いた遺伝子発現、ウェスタンブロッティング、免疫染色法、蛋白質相互作用の解析、発現変動因子のスクリーニング、などの手技を習得する。 (三好耕、高村明孝/5回) 最近見つかった精神・神経疾患脆弱遺伝子の機能的異常について、典型的な表現系を検出するいくつかの方法(遺伝子導入、PCR、蛋白質間相互作用等)を実際に用いて正常遺伝子を発現している場合と比較することにより、実際の研究のエッセンスを学ぶ。</p> <p>第1回 DNA、RNA(核酸)とは。</p> <p>第2回 セントラルドグマとタンパク質翻訳の過程(タンパク質の一生)</p> <p>第3回 PCR法に関する基礎知識</p> <p>第4回 タンパク質の取り扱いの基礎</p> <p>第5回 抗原抗体反応とは。</p> <p>第6回 DNAを増やす(PCR法の実践)</p> <p>第7回 DNAを回収する</p> <p>第8回 遺伝子配列を読む(DNAシーケンス)</p> <p>第9回 細胞培養の基礎</p> <p>第10回 遺伝子導入</p> <p>第11回 ウェスタンブロッティング法</p> <p>第12回 細胞免疫染色法</p>		

	第 13 回 タンパク質相互作用の解析
	第 14 回 遺伝子発現変動因子のスクリーニング法
	第 15 回 データ解析と実験結果のまとめ
授業外における学習	The Cell 「細胞の分子生物学」出版社: ニュートンプレス、「脳と精神疾患」加藤忠史 (著) 出版社: 朝倉書店等、分子生物学、脳科学に関する書籍に事前に目を通し、分子生物学に関連する専門用語について事前に学習しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・本演習では、初めて科学的実験を行う学生に対しても特段の配慮をして行う。 ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・定員を超えた場合は、分子生物学・生化学的実験に関して経験のない受講者を優先的に受け入れる

時間割コード	第1学期:774102 第2学:774202	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期8月1日(月)~4日(木)、第2学期2月6日(月)~9日(木) 各日1~4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	実験行動解析学演習	定員	2~4名
開講科目名(英)	Training Program on Animal Behavioral Experiments	単位数	2単位
場 所	福井大学ライフサイエンス支援センター生物資源部門	年次	2年
担当教員	松崎秀夫、謝敏かく、栃谷史郎(福井校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	実験行動解析学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	<p>神経発達障害の理解には、神経発達異常を有するモデル動物を用いた行動解析が必要不可欠である。この演習では、まず精神疾患モデル動物の行動解析研究で頻用されている行動評価方法について概説する。ついで、研究者の間でしばしば検討されている神経発達障害モデル動物を用いた行動解析実験を履修者に体験させ、その不安様行動評価、社会的行動評価、感覚運動機能評価、認知機能評価などの実践を行う。</p> <p>研究で用いる自閉症モデル動物には環境因子から発想されたもののほか、最先端の遺伝子改変動物の作成技術を駆使したモデル動物が検討されている。この演習では福井校で検討しているモデル動物の行動解析・評価手法を学ぶことにより、神経発達障害研究における動物行動実験の意義を学び、神経発達障害の病態理解を深めることを目的とする。</p>		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・神経発達障害研究における動物行動解析の意義について他者に説明できる。 ・動物行動の評価方法を理解し、他者と議論できる。 		
授業計画	<p>1. 講義(オムニバス方式/全5回) (松崎秀夫、謝敏かく、栃谷史郎/5回) 下記の項目について解説を行い、動物行動実験の理解を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 神経発達障害の病因論-遺伝的因子と環境因子 ② 遺伝的改変、環境因子の模倣などによる動物モデル作成法 ③ 実習で行う動物行動実験の意義、原理および方法の詳細 ④ 行動解析から得られる結果の疾患研究への応用 <p>2. 演習(全10回) (松崎秀夫、謝敏かく、栃谷史郎/10回) 実際に研究現場で用いられている自閉症モデル動物を使い、行動薬理的評価不安様行動評価、社会的行動評価、感覚運動系機能評価、認知機能評価などの手技を習得する。さらに得られた結果から、特定の環境要因、遺伝要因が動物の行動に与える影響について学習する。実習を通して得たデータの解析についても経験する。</p> <p>下記の順序で演習を行う。ただし、あくまで予定であり、状況に応じて変更もあり得る。</p> <p>第1回 講義:神経発達障害の病因論と動物モデル作成法</p> <p>第2回 講義:動物行動実験の意義と原理(1)</p> <p>第3回 行動解析演習:明暗弁別試験</p> <p>第4回 行動解析演習:迷路実験(1)</p> <p>第5回 講義:動物行動実験の意義と原理(2)</p> <p>第6回 行動解析演習:迷路実験(2)</p> <p>第7回 行動解析演習:移所行動解析(1)</p> <p>第8回 行動解析演習:移所行動解析(2)</p> <p>第9回 講義:動物行動実験の意義と原理(3)</p>		

	第10回 行動解析演習:迷路実験(3)
	第11回 行動解析演習:社会行動解析(1)
	第12回 行動解析演習:社会行動解析(2)
	第13回 講義:疾患研究における動物行動解析
	第14回 行動解析演習:データ解析の実践
	第15回 行動解析演習:結果発表と議論
授業外における学習	演習内容に関する予習・復習をする。関連する資料・情報を自身で積極的に調べ、理解する。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・演習を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、開始前に申し出ること。 ・動物実験時の上衣は生物資源部門で用意されているので、持参不要である。 ・この演習は1名では円滑な実施が困難であるため、学期あたり1名のみ受講の場合は、他学期での履修に変更を要請することがある。 ・演習内容の理解のため、1年次に「臨床遺伝・発達分子生物学」講義を受講していることが望ましい。

時間割コード	第1学期:774103、第2学期:774203	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期7月22日(金)～24日(日)、第2学期10月21日(金)～23日(日) 各日1～5時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	認知行動生物学演習	定員	2～4名
開講科目名(英)	Training Program on Cognitive and Behavioral Neurobiology	単位数	2単位
場 所	金沢校講義室	年次	2年
担当教員	柴 和弘、大黒多希子、堀家慎一、北村陽二、小阪孝史(金沢校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	認知行動生物学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	この演習では発達障害を含む脳機能障害の原因を分子レベルで研究する手法を学ぶ。発達障害などの原因候補遺伝子がわかった場合に、その遺伝子を患者と同じように改変したモデル動物を作出する方法を学ぶ。次にそのモデル動物の行動特性を解明するための各種の行動解析手法を習得する。さらに分子イメージング法により、モデル動物の脳の解剖学的変化や神経化学的变化を解析する方法を学ぶ。これらの一連の研究手法を習得することにより、実際の研究に役立つ情報を提供する。		
学習目標	RIを用いた in vivo イメージング研究の手法を体験し、他者に説明できる。実験動物を対象とした実験手技を体験し、他者に説明できるようにする。		
授業計画	<p>1. 講義(オムニバス方式/全6回) (柴 和弘/2回) 神経疾患の画像解析:精神・神経疾患の機能的変化や形態的变化を解析する方法として、分子イメージング技術が注目されている。これは生体機能分子や脳神経組織の変化に密接に関連した放射性核種標識分子イメージング剤を生体内に投与し、その変化を画像として捉え、解析することにより、客観的な診断・治療指針・治療効果判定に役立てる技術である。これらの原理・技術等について概説する。 (大黒多希子/2回) 実験動物を用いた実験:ヒトの疾患を分子レベルで理解するために、遺伝子改変動物などの実験動物を用いた研究が盛んに行われている。本講義では、遺伝子改変動物作製の基礎となる発生工学技術および、科学的、倫理的に適正な動物実験がどのようなものであるかについて概説する。 (堀家慎一/2回) 遺伝子改変動物および遺伝子改変ヒト iPS 細胞を用いた研究は、神経科学研究において必須の方法論となっているが、昨今の分子生物学の進歩に伴い、マウスおよびヒトゲノムを改変することが非常に容易になりつつある。本講義では、最新のゲノム編集技術を用いた疾患モデルマウスやモデルヒト iPS 細胞の樹立について、概説する。</p> <p>2. 演習(全9回) (柴 和弘、北村陽二、小阪孝史/3回) 神経疾患の画像解析演習:実際の研究手法としての脳神経機能分子イメージング技術の基本的な操作の習得を目的とし、放射性同位元素を使った動物実験(脳組織内局在分布、薬物負荷実験、飽和結合実験、オートラジオグラム等)の基礎技術及び解析を学ぶ。 (大黒多希子/3回) 遺伝子改変動物作製の基礎となる発生工学技術であるマウス胚および精子のハンドリングおよび、エレクトロポレーションによる RNA の胚への導入操作について学ぶ。 (堀家慎一/3回) 遺伝子改変マウスおよび遺伝子改変ヒト iPS 細胞の作出方法の理解とその基礎技術であるマウス ES 細胞・ヒト iPS 細胞の培養操作の習得を目的とする。CRISPR/Cas9 や TALEN といったゲノム編集に用いるガイド RNA やプラスミドベクターのデザイン方法からマウス ES 細胞、ヒト iPS へのトランスフェクションまでの基礎技術を学ぶ。</p> <p>第1回 (柴)RIの安全取扱いの基礎</p>		

	第2回 (柴)RI研究紹介
	第3回 (柴、北村、小阪)演習 RI動物実験(RIのマウス尾静脈投与方法)
	第4回 (柴、北村、小阪)演習 RI動物実験(マウス全脳及び各部位の摘出法)
	第5回 (柴、北村、小阪)演習 RI動物実験(放射能測定及びデータ解析法)
	第6回 (大黒)発生工学技術の概要
	第7回 (大黒)科学的、倫理的に適正な動物実験の概要
	第8回 (大黒)演習 マウス精子の取り扱いの基礎
	第9回 (大黒)演習 マウス胚の取り扱いの基礎
	第10回 (大黒)演習 マウス胚へのRNA導入の基礎
	第11回 (堀家)神経科学研究において遺伝子改変マウスを用いた研究の紹介
	第12回 (堀家)最新のゲノム編集技術の基礎
	第13回 (堀家)演習 ゲノム編集のデザイン方法
	第14回 (堀家)演習 マウスES細胞, ヒトiPS細胞の培養方法の基礎
	第15回 (堀家)演習 マウスES細胞, ヒトiPS細胞でのゲノム編集の基礎
授業外における学習	次回の授業内容を予習し、専門用語等の意味を理解しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	第1学期:774104、第2学期:774204	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期9月5日(月)~8日(木)、第2学期11月7日(月)~10日(木) 各日1~4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	画像生物学演習	定員	3名
開講科目名(英)	Training Program on Molecular Imaging Biology	単位数	2単位
場 所	浜松校臨床研究棟2階 213 セミナー室、 浜松 PET 診断センター診療部会議室	年次	2年
担当教員	尾内康臣、鈴木勝昭(浜松校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、 演習
講義題目	画像生物学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	PET (陽電子放出型断層撮影)、MRI (磁気共鳴画像法)や近赤外光トポグラフィなどの分子イメージング法は生体情報を非侵襲的かつ客観的に描出できる優れた特性を持ち、さまざまな病態の診断や治療効果判定の手段として広く普及している。これらの生体イメージングを概説する。		
学習目標	脳分子イメージングや脳機能イメージングの基礎理論を理解しその適応について適切に判断できる。それら手法の基礎手法を習得し応用的思考ができる。		
授業計画	<p>1. 講義(オムニバス方式/全5回) (尾内康臣/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒト脳の機能画像の測定法やデータ解析を講義する。 ・脳機能画像の臨床的関連を講義する。 <p>(鈴木勝昭/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・脳の解剖構造について講義を行う。 ・脳認知機能発達異常に関わる疾患の概略について講義を行う。 ・疾患に関連する認知機能とその仮説について講義を行う。 <p>2. 演習 (全10回) (尾内康臣/2回)</p> <p>PET、MRI、近赤外光トポグラフィを用いた病態解析や画像処理などの数学的あるいは物理学的処理の実技にあたる。さらに臨床データ、特に神経内科、精神科、脳神経外科領域の疾患画像データを解析する。その中で画像データとヒト脳の生理学的データとの関連付けを演習する。</p> <p>(鈴木勝昭/8回)</p> <p>PET を用いた分子イメージングにおいて画像が得られるまでのコンピュータ処理の概略を学び、さらに実際に臨床研究で使われる画像データを用いて、自ら画像データの処理・解析を演習する。</p> <p>疾患に関連する認知機能について仮説を立て、機能画像撮影の為の課題を作成とプログラミングを演習する。</p> <p>MRI にて画像が得られるまでのコンピュータ処理の概略を学び、さらに実際に臨床研究で使われる画像データを用いて、自ら画像データの処理・解析を演習する(fMRI (安静時、認知活動時、機能的関連解析)、脳容積解析、脳表解析、拡散テンソル画像解析)。</p> <p>第1回 講義)オリエンテーション・ガイダンス:脳の構造と諸領域の機能①</p> <p>第2回 講義)オリエンテーション・ガイダンス:脳の構造と諸領域機能②</p> <p>第3回 演習)MRI:fMRI による、諸認知活動時の脳機能解析</p> <p>第4回 講義)発達障害・精神疾患のPET 研究</p> <p>第5回 演習)PET 画像解析ソフトウェアの使い方の基礎</p> <p>第6回 演習)PET 画像解析の実際①</p>		

	第7回 演習)PET 画像解析の実際②
	第8回 講義)分子・光イメージングからみた脳の機能①
	第9回 講義)分子・光イメージングからみた脳の機能②
	第10回 演習) 分子光イメージングの手法や画像解析
	第11回 演習) 分子光イメージングの解析と読影
	第12回 演習)MRI:fMRI による、安静時の脳機能ネットワーク解析
	第13回 演習)MRI:脳容積解析と脳表解析による、脳白質と灰白質の体積解析
	第14回 演習)MRI:拡散テンソル画像解析
	第15回 演習)MRI:fMRI、容積解析、拡散テンソル解析による脳の総合的解析
授業外における学習	各演習に関してレポートを提出する。
教科書・参考書等	各講義・演習において資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・分子生物学演習、高次脳機能学演習を選択する場合には、本演習を受講するのが望ましい。

時間割コード	第1学期:774105、第2学期:774205	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期7月11日(月)~14日(木)、第2学期12月5日(月)~8日(木) 各日1~4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	高次脳機能学演習	定員	6人
開講科目名(英)	Training Program on Neuroscience	単位数	2単位
場 所	金沢校講義室	年次	2年
担当教員	齋藤 大輔、池田 尊司(金沢校)	授業形態	講義、演習
講義題目	高次脳機能学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	<p>ヒトの高次脳機能を調べるために、様々な非侵襲的な手法が用いられている。これらの最新の手法について、演習を通して計測原理や実際の運用などに触れることで、神経科学の実験的な技術についての有益な知識を得ることができる。</p> <p>そのなかで、1) 刺激提示ソフトを用いた、実験刺激作成と行動データ解析。2) 磁気共鳴画像法(MRI)による脳構造画像を用いた、脳の容積とヒトの行動や高次脳機能との関係。3) MEG(脳磁図)による、ヒトの高次認知活動に関わる脳内の神経活動に伴う変化。を明らかにするための演習を行う。</p> <p>こうした脳機能の検査課題作成やその計測原理についての講義、データ解析などについての実習を行うことで、最新の研究手法の理解や、高次脳機能研究についての実践的な理解を深めることを目的とする。</p>		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・各種ヒトの高次脳機能を調べるための手法について、その特徴を説明できる。 ・ヒトの脳の機能を理解し、その構造と機能との関連を説明することができる。 ・刺激提示および画像解析ソフトウェアを用いて、MEG、MRI データを取得・解析し、課題や個人の特性に関連した脳活動・構造を描出することができる。 		
授業計画	<p>A、B、Cのテーマ順に授業を進める予定である。</p> <p>A. Presentation (刺激提示ソフト) を用いた、行動データ解析演習</p> <p>ヒトの脳機能を調べるために、認知作業中の脳活動(神経活動や脳血流の反応)を計測する必要がある。そのため、認知課題を刺激提示ソフトウェアを用いて作成し、データ取得・解析を行うことで、脳機能研究に必要なスキルを身につける。</p> <p>(第1回~第4回:担当は池田・齋藤)</p> <p>B. VBM8 を用いた、脳構造画像解析演習</p> <p>ヒトの脳構造をMRI装置によって画像化し、脳の容積と個人(及び群間)の特性との関係についてVBM(Voxel-based morphometry)を用いて評価する。講義に加え、実際の計測、解析も行う予定である。(第7回~第12回:担当は齋藤)</p> <p>C. MEG (脳磁図) を用いた、脳機能解析演習</p> <p>ヒトの脳機能を調べる最新の装置であるMEGについて演習を行う。計測システムの概要・原理の講義に加えて、各参加者の脳機能を実際に計測・解析を行う。</p> <p>(第5回~第6回、第13回~第15回:担当は池田)</p> <p>第1回 Presentation(刺激提示ソフト)を用いた、行動データ解析演習(概説)</p> <p>第2回 Presentation(刺激提示ソフト)を用いた、行動データ解析演習(課題作成)</p>		

	第3回 Presentation(刺激提示ソフト)を用いた、行動データ解析演習 (行動実験)
	第4回 Presentation(刺激提示ソフト)を用いた、行動データ解析演習 (データ解析)
	第5回 MEG(脳磁図)を用いた、脳機能解析演習 (概説)
	第6回 MEG(脳磁図)を用いた、脳機能解析演習 (データ取得)
	第7回 MRI(磁気共鳴画像法)を用いた、脳構造データ解析演習 (概説)
	第8回 MRI(磁気共鳴画像法)を用いた、脳構造データ解析演習 (データ取得)
	第9回 VBM8 を用いた、脳構造画像解析演習 (概説)
	第10回 VBM8 を用いた、脳構造画像解析演習 (データ解析)
	第11回 VBM8 を用いた、脳構造画像解析演習 (データ解析)
	第12回 VBM8 を用いた、脳構造画像解析演習 (得られた結果の解釈)
	第13回 MEG(脳磁図)を用いた、脳機能解析演習 (データ解析)
	第14回 MEG(脳磁図)を用いた、脳機能解析演習 (データ解析)
	第15回 MEG(脳磁図)を用いた、脳機能解析演習 (得られた結果の解釈)
授業外における学習	配布された資料をもとに、実習中に触れた専門用語等の意味を理解し、得られた成果を簡潔にまとめること。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席回数が 2/3 以上に達した学生に対して、講義への参加・聴講態度をもとに判断し、一定の基準に達した者に対して、2単位を認定する。
コメント	授業を受講するにあたり特別な配慮(PC 操作、ノートテイク、座席の配置、コミュニケーション方法など)を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	第1学期:774106、第2学期:774206	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期7月25日(月)～28日(木)、第2学期2月20日(月)～23日(木)各日1～4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	小児発達神経学演習	定員	4名
開講科目名(英)	Exercise Class for Pediatric Developmental Neurology	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室、大阪大学医学部附属病院小児科外来、医学部5階子どもこころの分子統御機構研究センター室、病棟カンファ室	年次	2年
担当教員	谷池雅子、毛利育子、下野九理子、富永康仁、松澤重行、中西真理子、花家竜三(大阪校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	小児発達神経学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	当科目の担当者は、小児科医としての視点に立脚して、発達障害・睡眠障害を含む神経疾患の子どもを診療している。睡眠は重要な脳の機能であり脳の成熟、ひいては、子どもの社会面での発達に影響を与える。当大学は専門性の高い小児睡眠医療を行っている国内有数の施設である。この科目の目的は2つある。まず、「子どものこころの発達」を理解する上で重要な睡眠の精密検査や小児にルーチンで施行される電気生理学的検査を学ぶこと、さらに発達障害や睡眠の医療について小児科医の診療に密着しながら学ぶことである。		
学習目標	受講者が、「発達障害児の支援ネットワーク」作成において必須である、医療との連携について認識すること、「睡眠」の重要性を理解して支援の現場で個々の事例に指導ができるようになることをめざす。さらに、発達障害児の医学的評価法の実際を学ぶ。		
授業計画	<p>1. 講義(オムニバス方式/全6回) (谷池雅子/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小児睡眠関連疾患について実習における理解を促進するための基礎知識(睡眠の神経的な基盤、睡眠の重要性、小児期の睡眠関連疾患、発達障害児の睡眠異常等)を概説する。 ・睡眠の評価法について実際の機器を用いて概説する。 <p>(毛利育子/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小児科医が行う発達障害の評価法について概説する。 ・発達障害の実際の事例を下に、診療の実際と課題について参加者と討議する。 <p>(富永康仁/1回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達障害の患者に施行する脳波検査、誘発電位、脳磁図等の生理検査の基礎について概説する。 <p>(松澤重行/1回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小児睡眠疾患の事例を提示し、どのように評価、介入をすすめていくのかについて概説する。演習で実際に経験した症例についても討議する。 <p>2. 演習(全10回) (毛利育子・中西真理子/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達外来初診陪席:発達に問題を抱えて医療機関を訪れた患者をどのようなポイントで診断するかを学ぶ。 ・発達フォローアップ外来陪席:発達障害診療は診断に終始する訳ではなく、経年的に問題は変化し、福祉、教育現場との連携も必要である。実際の臨床に陪席することにより、どのような継続支援が必要かを学ぶ。 <p>(松澤重行/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・睡眠初診患者の陪席:睡眠の問題を抱えて病院を初診した子どもについてどのようにアプローチするかを学ぶ ・睡眠フォロー患者の陪席:睡眠への介入による影響を実際の患者を通じて体験する。 ・終夜ポリグラフ演習:睡眠評価法のゴールデンスタンダードである終夜ポリグラフを体験する。演習受講者の一人に被験者になってもらう場合もある。 		

	<p>(谷池雅子／2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カンファレンス陪席： 初診患者や精密評価のために入院している患者についてのカンファレンスに参加することにより、小児科医が行っている発達障害診療の現状について学ぶ。 ・睡眠データ解析： 終夜ポリグラフ、アクチグラフについて受講者から得られたデータを解析していく。 <p>(下野九理子・花家竜三／1回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・脳イメージング演習：脳磁図や MRI を用いて実際の測定から解析まで実習する。 <p>(富永康仁/1回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小児科病棟に入院中の神経難病の子どもの回診に参加することにより、これらの子どもにおけるこころの発達の問題を知る。
授業外における学習	オプションとして、授業がない水曜日午前中の外来陪席も可能である。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50% レポート課題は演習時に提示する。締め切りは演習終了 14 日後。
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・臨床ケースへの陪席を通しての演習となることから、内容や時間等について変更となること、また人数を超過する場合には、前期から後期への移動を検討いただくことを含めて調整をお願いすることがありますことをご了承ください。 ・終夜睡眠ポリグラフ演習では受講者の一人に被験者になる事をお願いすることがあります。その場合は事前にご連絡いたします。

時間割コード	第1学期:774107、第2学期:774207	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期7月11日(月)~14日(木)、第2学期10月3日(月)~6日(木) 各日1~4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	疫学統計学演習	定員	2名以上
開講科目名(英)	Training Program on Epidemiology and Biostatistics	単位数	2単位
場 所	浜松医科大学看護学科棟3階 情報処理実習室	年次	2年
担当教員	武井教使、土屋賢治、西村倫子(浜松校)	授業形態	講義、演習
講義題目	疫学統計学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	よい研究計画をつくるには、適切な仮説の設定が必須であるが、一方、仮説を支持するデータの「料理法」について見通しを持つこともまた重要である。すなわち、データをどう集め、解析し、結果を導きだし、どのように仮説の証明につなげるかという一連の流れを、実地の経験を積んで知っておけば、研究計画の実現可能性は飛躍的に高められる。この経験知が、本演習を通じて獲得できる「実践的疫学的知識」である。実際のデータを教材にしたコンピュータエクササイズに習熟し、かつ、その結果に科学的検討を加えた経験をもっているならば、「データに踊らされる」ことはなくなるはずである。本演習では初日にオリジナルのテキストを配布し、これに沿って講義・エクササイズを進める。エクササイズは基本的にテキストを活用して独力で進めるが、教員への質問や学生間のディスカッションを積極的に行うよう奨励している。		
学習目標	1. データを集める前に行うべきことを熟知し、実践できる。 2. 独力でデータの解析を行い、またその結果を解釈・説明できる。		
授業計画	<p>1. 講義(全4回) (武井教使/3回、土屋賢治・西村倫子/1回) データを扱うための疫学的知識の整理を行い、また解析の結果を解釈するための手ほどきを行う。</p> <p>2. エクササイズ(全11回) (土屋賢治・西村倫子/11回) 実際のデータを用いて課題に取り組み、学生同士での討論を含め、ゴールに至る道筋についての検討を行う。各自に1台ずつコンピュータおよびソフトウェアを用意し、テキストに沿って実地のトレーニングが進められるよう配慮する。ソフトウェアとして、スプレッドシートに Microsoft Excel、統計解析に汎用統計ソフトウェア STATA version 13 を用いる。</p> <p>第1回 講義(第1日):疫学統計学概論のおさらい・演習のゴール・統計ソフト概論 ~武井</p> <p>第2回 エクササイズ(第1日):スプレッドシートを使ったデータの扱い ~土屋・西村</p> <p>第3回 エクササイズ(第1日):エラーの洗い出し ~土屋・西村</p> <p>第4回 エクササイズ(第1日):統計ソフト Stata を用いたデータの概要の把握 ~土屋・西村</p> <p>第5回 講義(第2日):Continuous variables を扱う ~土屋・西村</p> <p>第6回 エクササイズ(第2日):Continuous variables の統計量と分布の把握 ~土屋・西村</p> <p>第7回 エクササイズ(第2日):Mean の比較と t-test, oneway ANOVA ~土屋・西村</p> <p>第8回 エクササイズ(第2日):Correlation と linear regression ~土屋・西村</p>		

	第9回 講義(第3日):Categorical variables を扱う ～武井
	第10回 エクササイズ(第3日):Categorical variables の統計量の把握 ～土屋・西村
	第11回 エクササイズ(第3日): χ^2 test ～土屋・西村
	第12回 エクササイズ(第3日):Logistic regression ～土屋・西村
	第13回 エクササイズ(第4日):総合演習1 ～土屋・西村
	第14回 エクササイズ(第4日):総合演習2 ～土屋・西村
	第15回 講義(第4日):総合討議 ～武井
授業外における学習	開始までに、[導入科目]疫学統計学のテキストに一通り目を通しておくこと。
教科書・参考書等	演習に用いるテキストは初日に配付する。以下は、有用な参考書であり、今後の研究の中でソフトウェア STATA を使うことを検討する学生には購入が推奨される。 1. Acock, A.C. A Gentle Introduction to Stata. StataCorp, 2014. 2. Juul, S. An Introduction to Stata for Health Researcher. StataCorp, 2014. 入手先: http://www.lightstone.co.jp/stata/press_books.htm
成績評価	出席 80%、討議 20%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・演習に際して、関数電卓(安価なものでよい)を準備するとよい。 ・導入科目「疫学統計学」の履修を済ませておくことを強く推奨する。 ・演習期間中に使うデータや解析ログを持ち帰ってもよい。希望者は USB メモリを持参のこと。
定員	2名以上

時間割コード	第1学期:774108、第2学期:774208	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期8月31日(水)~9月2日(金)、第2学期1月25日(水)~27日(金) 各日1~5時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	画像生物学演習2	定員	4名
開講科目名(英)	Training Program on Molecular Imaging Biology 2	単位数	2単位
場 所	福井校講義室	年次	2年
担当教員	友田明美、小坂浩隆、藤澤隆史、島田浩二、岡本悠子、藤岡 徹、謝敏かく(福井校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	画像生物学演習2		
開講言語	日本語		
授業の目的	本演習では「子どものこころの発達」を理解するための多角的な研究アプローチ、中でも、視線行動、内分泌(ホルモン)、脳画像に関する研究アプローチの知識・技術について学ぶことを目的とする。例えば、社会的情報に対する視線行動、オキシトシンなどの内分泌系、社会脳関連領域の脳活動などの特徴的なパターンの知識や解析技術(眼球運動計測、末梢ホルモン計測、fMRI 脳機能計測)の習得は、ヒト社会能力の発達および発達障害の理解を深めることに役立つ。また、これらの研究アプローチの知識・技術を土台に、各自の研究テーマとの接点を見出す機会となることを目指す。		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・視線行動、内分泌、脳画像に関する研究分野の知識・技術について説明できる。 ・これらの知識・技術の基礎を土台に、各自の研究テーマへの応用的思考ができる。 		
授業計画	<p>(1)脳の形態・構造について概説する。(2)課題関連の脳機能画像データ解析を通して、ある心的プロセスと特定の脳領域を非侵襲的に対応づける脳機能画像研究の知識と技術を学ぶ。また、MRI 実験の被験者体験を通して、各自の研究テーマに関連する実験課題設計を考える。(3)唾液中ホルモンの測定法について学ぶ。発達認知神経科学に関連したトピックについて概説する。(4)Gazefinder®を使った視線計測評価とその臨床応用を概説する。(5)精神医学研究や発達学研究の講義を行う。</p> <p>第1回 脳の形態・構造(講義)</p> <p>第2回 脳機能画像研究の概論(講義)</p> <p>第3回 脳機能画像データ解析演習(1):前処理(1)</p> <p>第4回 脳機能画像データ解析演習(2):前処理(2)</p> <p>第5回 脳機能画像データ解析演習(3):モデル作成</p> <p>第6回 脳機能画像データ解析演習(4):統計検定</p> <p>第7回 脳機能画像研究の読み方</p> <p>第8回 MRI装置を用いた脳機能計測実験演習(1)</p> <p>第9回 MRI装置を用いた脳機能計測実験演習(2)</p> <p>第10回 内分泌学実験演習(1)</p> <p>第11回 内分泌学実験演習(2)</p> <p>第12回 視線計測実験演習(1)</p> <p>第13回 視線計測実験演習(2)</p> <p>第14回 臨床講義(1):児童青年期精神医学</p> <p>第15回 臨床講義(2):小児発達学</p>		
授業外における学習	演習内容に関する予習・復習に取り組むこと。関連する文献・資料を積極的に調べ、その内容の理解を深めること。		
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。		
成績評価	出席50%、レポート50%		

コメント	<ul style="list-style-type: none">・演習を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、開始前に申し出ること。・MRI 実験の被験者体験のため、18～21 時まで演習を行う場合がある。・導入科目の「機能画像解析学」を、受講済みが望ましい。
------	--

時間割コード	第1学期:774109、第2学期:774209	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期6月27日(月)~29日(水)、第2学期1月30日(月)~2月1日(水)各日1~5時限(月曜日は6時限まで)(※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	子育て支援学演習	定員	5名以内
開講科目名(英)	Exercise Class for Psychological Support for Child Development	単位数	2単位
場 所	大阪校講義室	年次	2年
担当教員	酒井佐枝子、奥野裕子、山本知加、辰巳愛香、吉崎亜里香(大阪校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	子育て支援学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	子どものこころの健やかな成長を支える上で、また療育や支援における最大の効果を得るためには子どもが生活する環境に注目し、子育て環境を整えることが必要である。そのために必要な臨床心理学的な評価の方法と面接技法を概説し、子どもの個性に応じた支援を展開するために求められる発達障害児とその家族への子育て支援の方法を包括的に学ぶ。		
学習目標	確定診断と具体的支援を求めて医療機関を訪れた子どもと養育者に対して、支援方針を決定する上で必要な知識や検査手法、および支援について他機関との連携を含め実践的に理解する。		
授業計画	<p>オムニバス方式による講義と演習では、実際の短期集中・養育者一子の同室入院(パッケージ入院)もしくは外来面接「子育てサポート」での検査と、子育て支援臨床面接等の陪席および症例カンファレンスへの参加を通して、子育て家庭への支援に求められる専門性と柔軟性について理解を深める。</p> <p>第1回 講義:支援概論 ASD 児とその家族への支援を行う際には、どのような方針をたて支援を展開するか判断することが必要となる。支援方針を決定する際には、子ども・養育者の特性に加えて地域資源といった子どもが生活をする環境を包括的にとらえたアセスメントが求められる。演習に先立ち、支援職として持つ必要がある基本的視点を概説する。</p> <p>第2回 演習:自閉症診断面接1 ASD のアセスメントについて概説し、本人や養育者への面接技法について理解を深めた上で陪席を通して、臨床に必要な態度を学ぶ。</p> <p>第3回 演習:自閉症診断面接2 自閉症診断面接について、本人や養育者に対する面接技法への理解を深めた上で、陪席を通して、臨床に必要な態度を学ぶ。</p> <p>第4回 演習:事例検討 自閉症診断面接を通して得られた観察記録をもとに、スコアリングについて学ぶ。</p> <p>第5回 講義:支援方針の構築 事例をもとに、得られた検査結果や主訴をもとに支援方針の組み立て方を概説する。</p> <p>第6回 演習:症例カンファレンス 第2~5回での演習をふまえ、多職種間による見立てと方針に関する議論を行う。</p> <p>第7回 演習:臨床面接陪席1 自閉症療育の臨床面接、親面接・子面接への陪席を通して、事例へのアプローチ方法を学ぶ。</p> <p>第8回 演習:ふりかえりシート作成 陪席した事例について、面接内容を養育者にわかりやすくフィードバックするためのふりかえりシートの作成実習を行う。</p> <p>第9回 演習:ふりかえりシート発表 第8回で作成したふりかえりシートの発表を通して、親子へのよりよい支援の提示の仕方について議論を深める。</p>		

	<p>第10回 講義:ペアレントトレーニング 発達障害児とその家族に有用とされる支援の一つとして、ペアレントトレーニングがあり、特にAD/HDの子どもを持つ養育者の養育行動の変容を促す効果的な取り組みの一つとして、その有用性が示されている。こうした養育者へのアプローチを発達障害児、また子育てに困難さを持つ養育者全般に広げることの必要性とその効果について体系的に講義し、併せて医療機関での取り組みを紹介する。</p> <p>第11回 演習:問題解決プログラム 児童期後期から思春期前期のASD児にとって、日常で遭遇する社会的問題の解決プロセスを学ぶことは、様々な場面での適応に大きく影響するものと考えられる。ここではASD児に特化した問題解決のプログラムについて概説し、医療機関での取り組みを紹介する。</p> <p>第12回 講義:応用行動分析 無発語ASD児のコミュニケーション発達支援について、応用行動分析を応用した個別療育について概説し、ビデオ教材等を用いて支援の具体的方法についての理解を深める。</p> <p>第13回 講義:ソーシャルスキルトレーニング ASD児が学校などの集団生活で適切なコミュニケーションや対人関係を発揮する上で、ソーシャルスキルの学習は重要といえ、こうした学習はその後の二次障害の予防にもつながるものと期待される。集団によるソーシャルスキルトレーニングについて概説し、その実際について学ぶ。</p> <p>第14回 演習:臨床面接陪席2 自閉症療育の臨床面接、親面接・子面接への陪席を通して、事例へのアプローチ方法を学ぶ。</p> <p>第15回 演習:討論と総括 養育者—子関係、養育者特性を考慮するための視点を概説した上で、子どもの健やかな成長発達を促進するために必要な支援を総括する。</p>
授業外における学習	受講生がこれまでに/現在関わりを持っている臨床現場における事象や研究対象者について、授業で提示される視点から批判的に分析し、実践に役立てるための方策を考えることを通して復習しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席70%、演習レポート30%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・臨床ケースへの陪席を通しての演習となることから、内容や時間等について変更となること、また少人数での開講を予定していますので人数過多となる場合には、人数の調整または日程の変更を行う事がありますことをご了承ください

時間割コード	第1学期:774110、第2学期:774210	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期7月20日(水)~23日(土)、第2学期2月1日(水)~4日(土) 各日1~4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	コミュニケーション支援学演習	定員	8名以内
開講科目名(英)	Training Program on Communication Disorders	単位数	2単位
場 所	金沢校講義室、平谷こども発達クリニック	年次	2年
担当教員	大井 学、荒木友希子、吉村優子、平谷美智夫、小林宏明(金沢校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	コミュニケーション支援学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	対人コミュニケーションは、ヒト社会における情報交換の基幹である。この情報交換の発達と子どものこころの発達には密接な関係がある。本演習では、対人コミュニケーションの発達異常、その診断法、さらに支援法に関して講義・演習を介して学ぶ。		
学習目標	人と人のコミュニケーションのメカニズムを分析する手法を、会話分析、実験法、臨床評価の3つの分野にまたがって獲得する。		
授業計画	<p>1. 講義(オムニバス方式/全6回) (大井 学/2回) 発達障害と子どもの心をめぐる諸問題を子どもと大人あるいは子供と子供のコミュニケーションの不全という観点から概説する。 (小林宏明/1回) 発達障害と子どもの心をめぐる諸問題を子ども及び大人のコミュニケーション能力の未熟さという観点から理解する。 (吉村優子/1回) コミュニケーション能力の発達、行動学的評価、コミュニケーション能力の背景にある音声・音知覚能力の測定評価について概説する。 (荒木友希子/1回) 支援者のコミュニケーション・スキルの習得を目的としたマイクロ・カウンセリングの理論について概説する。 (平谷美智夫/1回) クリニックでの診療場面を見学していただき、発達障害の診断プロセス・治療・療育を通して発達障害の理解を深めていただく。</p> <p>2. 演習(全9回) (大井 学/2回) 高機能自閉症、アスペルガー症候群、学習障害、特異的言語障害、注意欠陥・多動性障害、不登校、集団不適応などの種々の障害をもつ子どものコミュニケーションを観察・記述する方法を学ぶ。 (小林宏明/2回) 各種検査の成績とコミュニケーションのビデオ記録などの教材を活用して、言語能力、社会的認知、感覚運動機能、感情機能などがコミュニケーションに及ぼす影響について評価にあたる。 (吉村優子/1回) 発達障害の行動学的評価法などについて、模擬場面で知る。また、末梢から中枢までの聴覚情報処理の評価法について学ぶ。 (荒木友希子/2回) マイクロ・カウンセリングの各技法(基本的傾聴、および、積極技法)について、ロール・プレイによるトレーニングの体験を通じて実践的に学ぶ。 (平谷美智夫/2回) 主に医療(診断・治療)・療育面から、有効な支援の方法に関して演習を行い、有効な支援のあり方について習得する。</p> <p>第1回 自閉症児と大人との会話分析 I 講義</p>		

	第2回 自閉症児と大人との会話分析Ⅱ講義
	第3回 自閉症児と大人との会話のビデオ分析Ⅰ
	第4回 自閉症児と大人との会話のビデオ分析Ⅱ
	第5回 発達障害がある子どもとのコミュニケーションを考える際の視点
	第6回 発達障害がある子どもとのコミュニケーションを考える1(認知能力との関係)
	第7回 発達障害がある子どもとのコミュニケーションを考える2(感情機能との関係)
	第8回 発達障害児におけるコミュニケーション発達の概要
	第9回 発達障害のコミュニケーションや聴覚情報処理の評価法
	第10回 マイクロ・カウンセリングの理論
	第11回 マイクロ・カウンセリングの実践(基本的傾聴)
	第12回 マイクロ・カウンセリングの実践(積極技法)
	第13回 発達障害の診断・治療・療育(講義)
	第14回 発達障害の診断・治療・療育(演習)
	第15回 発達障害の診断・治療・療育(演習)
授業外における学習	講義に関連する文献をあらかじめ配付する。それを熟読したうえで講義に臨む。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席回数が2/3以上に達した学生に対して、講義への参加・聴講態度をもとに判断し、一定の基準に達した者に対して、2単位を認定する。
コメント	・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること。

時間割コード	前半:74111、後半:74211	開講区分	第1学期
曜日・時間	集中講義(合宿形式):前半8月16日(火)~20日(土)、後半8月21日(日)~25日(木) (ともに予定)(※前半・後半のいずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	社会支援学演習	定員	前半・後半それぞれ3名以内
開講科目名(英)	Training Program on Social Services for Developmental Disabilities	単位数	2単位
場 所	愛知県知多郡南知多町日間賀島	年次	2年
担当教員	高貝 就、辻井正次、鈴木勝昭、野村和代、土屋賢治(浜松校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	社会支援学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	子どもの障害に対する社会支援を行うために必要な、個々の子どもの査定方法、査定された障害を持つ子どもに対する個別支援プログラム作成と実施方法、効果評価法について学ぶ。		
学習目標	発達障害をもつ子どもに対する合宿形式の支援プログラムの概要を説明できる。 発達障害をもつ子どもの支援プログラムの開発過程を説明できる。		
授業計画	<p>1. 講義、演習(全15回) (高貝 就、辻井正次、鈴木勝昭、野村和代、土屋賢治/15回) 発達障害をもつ子どもたちの自立に向けた、生活能力の向上と課題への取り組みの改善を目指す合宿形式の支援プログラムにスタッフとして参加し、実際に個別支援プログラムを作成・遂行することを通して技術を習得する。 合宿は4泊5日の日程で行い、各日の夜(最終日は昼)にその日の進捗報告とディスカッションを行う。 合宿に先立ちスタッフ向けの事前ガイダンスを行う。ここでは、担当する支援プログラムを決める予定であるので出席すること。平成28年7月30~31日を予定している。</p> <p>実施予定プログラムは以下のとおり。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 相互交渉(入門/上級) ② 困ったことへの対応 ③ アサーション(自己表現) ④ 日常生活快適化 ⑤ リラクゼーション ⑥ 双方向コミュニケーション(入門/上級) ⑦ テンションの調整 ⑧ 気分は変えられる(入門/上級) ⑨ ライフプランニング 		
授業外における学習	演習参加の前に、下欄に示した書籍を読んでおくこと。		
教科書・参考書等	<ol style="list-style-type: none"> 1. 辻井正次ほか(著)『特別支援教育 実践のコツ: 発達障害のある子の〈苦手〉を〈得意〉にする』, 金子書房. 2011年. 1944円. 2. 辻井正次、アスペルゲルデの会(編), 『楽しい毎日を送るためのスキルー発達障害ある子のステップアップ・トレーニング』, 日本評論社. 2012年. 1944円. 3. 辻井正次(著)『発達障害のある子どもたちの家庭と学校』, 遠見書房. 2013年. 1944円. 		
成績評価	出席50%、レポート50%		

コメント	<ul style="list-style-type: none">・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること・合宿の前半と後半とでは実施する支援プログラムが異なる予定である。詳細は上述の事前ガイダンスで周知する。・日程は、いずれも、やむを得ない事情により変更される場合がある。
------	---

時間割コード	第1学期:774112、第2学期:774212	開講区分	第1、2学期
曜日・時間	集中講義:第1学期8月1日(月)～4日(木)、第2学期2月6日(月)～9(木)各日1～4時限 (※いずれか一つを受講すること。)		
開講科目名	認知行動療法学演習	定員	6名以内
開講科目名(英)	Training Program on Cognitive Behavioral Therapy	単位数	2単位
場 所	千葉校講義室、千葉大学医学部附属病院	年次	2年
担当教員	清水栄司、中川彰子、中里道子、伊藤絵美、浅野憲一、大島郁葉、浦尾悠子(千葉校)	授業形態	講義(オムニバス方式)、演習
講義題目	認知行動療法学演習		
開講言語	日本語		
授業の目的	不安症(パニック症、社交不安症)、強迫症、うつ病、摂食障害(神経性大食症)、発達障害などの精神障害に対する認知行動療法の科学と実践について、実際の症例に基づき、習得・演習する。また、臨床現場における介入的、および予防的な認知行動療法の臨床演習を行う。		
学習目標	不安症(パニック症、社交不安症)、強迫症、うつ病、摂食障害(神経性大食症)、発達障害などの精神障害に対する認知行動療法の科学と実践について体験的に理解し、自身の職務や生活に適した形で活用できること。		
授業計画	<p>1. 講義(オムニバス方式/全5回) (清水栄司/1回) 社交不安障害 (中川彰子/1回) 強迫性障害 (中里道子/1回) 摂食障害 (伊藤絵美/1回) 大うつ病性障害 (大島郁葉/1回) 発達障害に対する認知行動療法</p> <p>各疾患症例のセッションの録画・録音を検討しながら、認知行動療法の科学と実践を習得する。</p> <p>2. 演習(全10回) (清水栄司/1回) 不安症の個人認知行動療法の症例検討 (中川彰子/2回) 認知行動療法の臨床演習(主に強迫性障害を対象とする) (中里道子/1回) 千葉大学医学部附属病院こどものこころ診療部における臨床演習 (伊藤絵美/2回) 認知行動療法の臨床演習(主に大うつ病性障害を対象とする) (浅野 憲一/2回) 認知行動療法の臨床演習(強迫性障害及びコンパッション・フォーカスト・セラピー) (大島郁葉/1回) 発達障害に対する認知行動療法の臨床演習 (浦尾悠子/1回) 教育現場における認知行動療法を用いた支援の演習 不安障害、強迫性障害、うつ病、発達障害など疾患の症例を検討しながら、認知行動療法の臨床演習を行う。</p>		

授業外における学習	授業前に「認知行動療法学」の授業資料を復習し、認知行動療法に関する理論モデルや専門用語等について理解しておくこと。
教科書・参考書等	授業中に指示、または資料を配付する。
成績評価	出席 50%、レポート 50%
コメント	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を受講するにあたり特別な配慮を必要とする学生は、授業開始前に申し出ること ・関連科目である認知行動療法学を受講していること。 ・臨床ケースを扱う演習となるため、内容や時間、担当教員等について変更があること、人数の調整が必要になることがあります。その場合は、日程変更や人数調整をお願いしますのでご了承ください。

